法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

「法政哲学」創刊によせて

Fukushima, Kiyonori / 福島, 清紀

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
2
(発行年 / Year)
2005-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008150

Hosei University Repository

「法政哲学」創刊によせて

法政哲学会会長　福島清紀

法政哲学会は今年で創設二五周年を迎えた。その記念すべき年に旧会誌「法政哲学会会報」を改称し、「法政哲学」を創刊する。これは四半世紀にわたる本会の活動の成果であると同時に、新たな歩みへの出発点であると言えよう。本会は昨年から今年にかけてお二人の元会長、濱田義文先生と山村直資先生のご逝去の報に接したが、幽明界を異にした今、両先生の足跡にも思いを致し、会誌の更なる充実を図らねばなるまい。

新しい会誌の名称には、本会が独自の存在意義を示すことへの意欲が込められている。その意欲を具現化していくためには、思うに、「哲学」のあり方をめぐる未解決問題の自覚が不可欠であろう。

日本が「鎖国」を解いて世界連関網に組み込まれてから一五〇年を閲した。怒濤の如く押し寄せる西洋の文物を前にしてその受容の衝に当たり、諸学の移植に努めた人物の一人が、周知のように「蕃書調所」教授方、西周である。近代西欧の「フィロソフィ」と出会った西は当初、「賢哲」を希求する学の意味で「希哲学」あるいは「希賢学」と訳していたが、やがて「希哲学」をつづめて「哲学」と称するようになった。文献上、「フィロソフィ」が「哲学」と訳出されたのは西の『百一新論』(一八七四年)をもって嚆矢とする。その後、『哲学字彙』の刊行(一八八一年)や「哲学会」の設立(一八八四年)などを経て次第に「哲学」という訳語が定着し、それとともにアカデミックな哲学界が形成される。しかし、哲学は輸入学問の性格が強く、日本人の日常生活との結びつきは稀薄であった。

かつて戸坂潤は「哲学と文章」(一九三五年)と題する論説で、西欧のデカルト、ロック、カントらが「俗語」で著作を書いたことの意義を指摘し、それとの対比で、翻訳語を用いざるをえない日本の哲学の特殊事情も視野

Hosei University Repository

に入れつつ、次のように述べた。「日本の哲学は今だに大衆が用いている俗語を学術語としてこなすだけの階級的雅量がなく、哲学の叙述の多くは一種の官僚的な美文として取り残されている。」以来、七〇年が経過したが、日本の哲学は戸坂が看破した閉鎖的な状況を脱したのであろうか。

今日の日本では、諸外国の哲学・思想の紹介や研究がますます盛んであり、そのこと自体は文化交流の観点から誠に賀すべきことである。けれども、書き手と読み手が共に学術哲学の世界の住人であるという前提を取り払ってみると、一方には、舶来品崇拝の心性と通底する単なる学術哲学による官僚的美文の再生産があり、他方には、哲学を難解なものと受けとめる感覚的基盤が根強く存続しているように思われる。日本社会において哲学は人々の日常的な生を支える「物質的な力」になりえていないのではないか。「哲学する」という営みの根源性がしばしば視野の外に置かれ、恰も哲学がテクノクラートの占有物であるかのように受けとめられてはいないか。疑問を禁じえない。

確かに、未踏の研究領域に踏み込もうとすれば、既存の概念や日常語に頼ることができず、記述が難解になりがちではある。だが、私たちが哲学研究の当事者たろうとする限り、いかに困難であろうとも、学術的探求を深めることと日常語の世界に立ち戻ること、このいわば往還二相の知のヴェクトルを常に担うべきではなかろうか。蓋し、「とは何か」というソクラテス的問いの発生する場面は日常的な現実の真只中に潜んでいるはずである。

今回の会誌の改称は一つの里程標にすぎない。新しい革袋はそれにふさわしい新しい酒を必要としている。法政哲学会は、日本社会の様々な局面に見られる精神の「鎖国」を排し、叡智を結集してこれまで以上に自由闊達な開かれた思考実験の場を構築していきたい。

末筆ながら、「法政哲学」創刊に当っては、法政哲学会委員会の専門委員会として設置された会誌検討委員会（現会誌編集委員会）の委員長、大東俊一氏をはじめとする委員諸氏、とりわけ白根裕里枝氏にご尽力いただいたこと、また、故佐藤康明氏のご遺族からのご寄付も会誌発行の推進力となったことを会員の皆様にお伝えして、関係各位に心からお礼を申し上げる次第である。